

仏教にかんする一試論

高橋隆雄

私はここで仏教にかんする一つの解釈を提示してみたい。この解釈は、私には単純素朴に思えるので、これまでにも同様のものが多くのひとによって考えられてきたと思われる。それを私なりのしかたで定式化し、それに関係するいくつかの問題を考察するというのがここでの主題である。

日常的世界では様々な信念や思い (belief) が重要な地位を占めているのは言うまでもないことである。ここで次のような例を考えてみよう。テレビでリポーターがエベレスト山の頂上からの眺めを背景にして、過酷だった登山について興奮げに話しているとする。われわれは、たいていの場合、この映像をエベレストからの本当の眺めだと信じてテレビを観ている。ちかごろ「やらせ」ということが話題になることがあるが、これも、ふつうわれわれはテレビのドキュメンタリー番組の内容を本当のことと信じているということを物語っている。このような信頼の念や信用にわれわれの生活の多くは基づいているといえる。

そうした信頼や信用が生ずる理由の中で特に重要と思われるのは、この例で言えば、テレビが社会的責任を負った信頼における情報源であることである。また、その映像の真偽についてチェック可能であるということも重要である。チェックの仕方はいろいろ考えられるが、そのうちの一つは、特定の条件さえ整えば、その映像が反復可能なものである、すなわち、われわれにもそれが原理的には追体験可能であるということであると思われる。つまり、日常の場面において「A

仏教に関する一試論（高橋）

ということを信じる」という場合、自分自身がそれを直接に経験したのでなければ、信頼できる情報源からのものであることと、少なくとも原理的にチェック可能であるというこのいずれか、あるいは両者が成立しているといえるのではなからうか。

信じられた内容Aが宗教的なものであるとき、その信念は宗教的信念、信仰と呼ばれる。そして、たいていのひとは宗教的信念と日常における信念とは、その内容「A」においてのみならず、上述したような、信念を持つに至る、あるいは信念をもっていることを正当化する理由においても異なっていると考えている。そしてまた実際、多くの宗教において確かにそういえると思われる。日常的信念においてはたいていそれら理由の両方が成立している。たとえば、われわれは歴史上の出来事について種々の信念を持っており、そこでは反復可能ということが成立してはいないが、原理的にはチェック可能であり、また、それらは信頼に足る情報源からのものでもある。また、理由が特に意識されない、いわば習慣的な信念も数多く存在するが、それらを正当化しようとするれば上述の理由が重要なものとみなされるであらう。

しかし、宗教的信念においては、これら日常的信念の場合とは異なる理由を考えなければならぬといわれることが多い。このような考えにたいして、私は、それが宗教一般にあてはまるものではないこと、そして、私見によれば、少なくとも仏教にかんしては、日常的な信念の成立や正当化にかんする理由づけに近いものがあてはまるものとして解釈可能であることを以下で示してみたい。そして、そうした理由づけに基づくことに伴って生じてくると思われる問題へも考察をすすめてみたいと思う。

ここで、さきに挙げたエベレストの例をもう一度考えてみよう。われわれはテレビの映像を実際にエベレスト山からのものとして受けとる。それはテレビという情報源が社会的にきわめて重要なもの、信頼に足るものと一般にみなされているからであり、また、その映像が以前に見たテレビや写真でのものとよく似ていたり、テレビ局のスタッフの足取りを追うことで原理的にチェック可能であると思われるからである。

私は、これと宗教的真理の場合とを類比的に考えたいと思っている。一方は山頂からの眺めで他方は真理にかかわるといふ点で納得できないひとつもいるかもしれない。それにたいしては、たんに眺めではなく、たとえば、山頂からは第三キャンプと第四キャンプとがかくかくの位置関係にある等々の事実を挙げるならば、両者とも真理にかかわるので、それらの間の類似性がさらにはつきりするだろう。また、宗教的真理とエベレスト山頂からの眺めとは、一方は知覚不可能だが他方は可能であり両者は相違しすぎているという批判にたいしては、科学の例をもちだして答えることができる。たとえば物理学者が原子核のことにかんして何ごとかを著書において述べるとき、あるいは、そのことをテレビや新聞等で発表するとき、その物理学的事実が五感によっては知覚できないにもかかわらず、われわれは通常そのことに疑いをいだかない。それは、彼が信頼に足るひとであり、しかもチェック可能なことについて述べているからであるといえる。

よって、それらと宗教的真理とのあいだに類比が成りたつための最も重要なこととして、テレビの映像や物理学者の言葉を本当のものとして当然に受けいれる条件が宗教の場合にも成立しているかが問われなければならない。まず、信頼に足る情報源があるかという点について考えてみる。この点については、仏教にかぎらず殆どの宗教の開祖や高僧、聖人は信頼できる人物であり、自分の経験したことや真であると考へていることのみをひとびとに伝えたということは一般に認められていることであると答えることができるだろう。

すると、問われるべきはチェック可能性である。私は、この条件がほとんどの宗教において充たされていないばかりか、そうしたことを問うこと自体が宗教の本義に反するという主張が多く^(注)のひとからなされるであろうことを承知している。しかし、ここでの私の考察は、上述したように、日常的な信念の成立や正当化にかんする理由づけに近いものが宗教的信念にもあてはまるものとして仏教を解釈可能であるかということにある。そこで、その条件を考へてみると、それは仏教においては充たされうるといえるのではないかと私には思われる。その理由は、これまで多くの修行者が、所定の方法に従って或いは独自の仕方^(注)で悟達したこと、つまり、釈迦の説いたのと同様の真理に達したこと、そして、われわれでさ

仏教に関する一試論（高橋）

え、きわめて厳しい修行を積めばそれが不可能でないこと、すなわち、仏教における真理の経験は原理的に反復可能であることを仏教の歴史は示していると思われることにある。つまり、信頼のおける多くのひとびとが同様のことを繰り返して経験してきたということは、彼らが経験したとされるのが、実際にわれわれがそれを経験できるかどうかはともかくとして、実在するものであることをわれわれに信じさせるのに十分であると思われる。

このように、宗教的信念の理由づけにかんする説明を日常の説明と類比的にすれば、事実や真理の存在を他のひとを通じて信ずるということにならざるをえない。これは、テレビの映像や物理学者の話ほどではないにしても、多くのひとに信ずる理由を与えることができるのではないかと思う。ところが、事態はそれほど単純ではなく、ここには大きな問題が横たわっている。

つまり、これは、たとえば神 (God) の存在することにかんして一応の納得のいく根拠を示したということとは事情がちがうのである。神あるいは宗教における絶対者が問題である場合、たいていは、それが存在することはそれを信じるひとに救いをもたらすということを含んでいる。それゆえ、その存在証明はほとんどの問題を解決することになるといえる。ところが、仏教の場合には、存在している真理を信じればよいというのではないように思われる。というのは、そこには、つねに真理の体得、経験という知の側面があるように思われるからである。

そこですまず、いわゆる宗教的真理（その定義についてはここでは問わないことにする）とわれわれとの関係について二つの立場を分けてみたい。一つは、われわれは宗教的真理を知りうる、それを経験しうるという立場であり、もう一つは信仰によってのみそこへ達するという立場である。もちろん、信ずるということはあらゆる宗教にとって真理に至る不可欠のことではあるが、このように分けることができるだろう。すなわち、ある宗教では宗教的真理を知ったり経験したり体得したりすることがわれわれにとって可能であり最高のこととして説かれているが、他ではそれは認められず、信ず

ることよつてのみわれわれは宗教的真理とつながりを持つことができるとされる。その場合、真理とわれわれとがつながるとは、われわれが救われるということにはかならない。

私がここで論じようとしている仏教は、前者に分類できる。修行者の究極目的は真理を体得すること、悟達すること、そしてそれと同時に救済されることにあり、真理は修行者にかくかくのこととして、たとえ言葉ではそのものを記述できないとしても、明瞭に現れてくるといわれる。修行者の修行の仕方や生まれつきの素質による違いはあるにせよ、ともかく一定の条件さえ整えば、真理はその人に現れてくる。つまり、仏教によれば、さきに述べたように、この真理はわれわれにとつて反復可能なものとしてある。いいかえれば、一定の条件の下では、われわれはこの同じ真理を追体験可能なのである。

そうなる、いま述べた「一定の条件の下で」ということが重要になるが、この条件は初期の經典を見るかぎりきわめて厳格なものであり、一般の俗人ではそれを充たすことは、不可能であるままではいえないにしても甚だ困難である。それでは、われわれ一般の者がその真理の存在を信じることの意味は一体どこにあるのだろうか。信じるだけで救われるという構造が成りたつていればこのような問いは生じてこないのではあるが。

仏教の歴史をふりかえてみると、後になって、出家者、あるいはごく一部の限られた世俗の者のみならず、ほとんど或いは全ての人に真理への道を開くことが要請されてくる。これに応えようとしたのがいわゆる大乘仏教である。ところが本当にすべてのひとに真理が開かれるためには、うえで述べたような問題を避けて通れないことになる。玉城康四郎著『仏教の根底にあるもの』（講談社学術文庫）によれば、釈迦以来の多様な仏教の展開を通じてその根底にあるものは、救いと悟りという二つの別個の目的地ではなく、救い即悟りという目覚めであるという。玉城氏はこのことよつて、たとえば浄土教の信仰では救いが主題であり、禅では悟りを目標としているという一般的理解に異議を唱えようとしている。私は玉城氏の見解に賛同するものである。それというのも、仏教の歴史をふりかえてみると、救いと悟りという両者は

仏教に関する一試論（高橋）

あたかも車の両輪のように常にあいともなっているとと思われるからである。すると難問が生じてくる。つまり、本来厳格な修行によってのみ把握できた真理を、いかにして一般の世俗の者、在家の信者が体得することができるのかという問題である。このことは、救いと悟りが別個の目標であれば生じてこない。なぜならば、そのときには、出家者等の一部の者は両方を達成でき、大多数の世俗の者は救いという目標のみ至ることができるといふように区別することができるからである。

日本における仏教の中では、いわゆる難行道に対する易行道としては浄土系と日蓮系の仏教がよく知られているが、ここでも、極端にいえば一遍の念仏や題目によっても救われるのみならず悟りに達しようということが説かれる。このことを説明するのに、たとえば、もともとわれわれは仏（覚者、つまり悟った者）であるとか、われわれは悟りに至る可能性を本来もっているとか、信ずることは即ち知を生じさせるとか、一遍の念仏や題目が敬しい信仰心を伴って唱えられるとき悟りに至りうる等々、種々のことがこれまで言われてきた。それらの説明の当否はともかくとして、救いのみならず悟りということも仏教の歴史を通じて常に念頭にあったということはこのことから言えそうである。つまり、仏教においては、信ずることによる救いという要素がいかに強い場合であろうとも、真理の経験、悟達という側面がそこにはつねに存在しているといつてよいだろう。

このように仏教においては真理は経験されうるもの、反復されうるものとしてあるが、これに達するには厳しい修行を要するものであった。このことと、一般の世俗の者もその真理に到達しようということとは調停が困難なことのように思える。私は、しかし、それが調停不可能であるとは思わないし、実際、多くの説明がそれにかんしてなされてきたが、私は、そのことを、上述したような説明とは違う仕方でも示してみたいと思う。つまり、日常的信念をもつに至るとそれほど異なる理由に基づく、いわば宗教らしくない信念を問題にしつつ、そのことに応えてみたい。

仏教において真理に到達するといふときそこでは、修行者は經典なり先導者の言葉なりに納得することでそれらを信じ、

そして自らが真理に達して悟りの境地に至る。彼は真理を自分自身で体験するのである。これに対して私は、真理には自ら直接にのみならず間接的にも達しようということを主張したい。すなわち、經典や先導者を信じて厳しい修行によって自ら真理に達した多くのひとびとの言動を通じて、われわれ世俗一般の者は彼らの経験したところのものが実在することを信じ、そのことによって、間接的にはあるが、真理とつながりを持つことができる、と。

それでは真理を間接的に知るとはどういうことであるのか。しかし、そのままにそもそも仏教における真理とはいったいなんであるのかが問われなければならない。

伝統的にはそれは、四諦とか十二因縁という言葉でいわれているが、その根本にあるのは、無我、あるいは無執着ということによって苦悩の消滅、安心の境地の確立がなされるということにはかならない。このことを以下で私なりのしかたでとらえなおしてみようと思う。

われわれは生きていくかぎり様々な出来事に遭遇し、その都度いろいろな感情や感覚がわれわれに生じてくる。いわゆる喜怒哀楽といわれるように様々な感情のなかにわれわれは生きている。そのなかでも、強さにおいても持続性においても、特に実在感をもっているのは苦痛や苦悩にかんする感情であるように思われる。それは、われわれが老病死をまぬがれることができないということにおいて頂点に達する。仏教では、人間につきまとうこれら苦悩の根源をたずねた結果として、それが結局のところ、われわれにおける執着に由来するということを見いだした。この執着という根源をつきつめない全ての試みは苦悩の領域における活動にはかならず、苦悩を癒すことはできない。安心の境地に住して平静な心でもって生きていくためには、われわれの活動の根底にあるとさえいえる執着の心や日常的な意味での欲求、愛を放棄することが要求されるのである。

執着の心を断つということは、そうした執着の心の生ずる環境から遠ざかったり、苦悩のよってきたる根源を徹底して

仏教に関する一試論（高橋）

考えるといったことによつてなされるが、それは生半可な修行によつては成就できないことはいうまでもない。家庭をもち、友人たちとまじわり、社会の一員として生きるかぎり、さまざまなものによつて心はとらわれてしまいがちである。そのようななかで苦悩を根本的に癒すことは、不可能ではないにしても、ごく一部の限られたたひとによつてしか達成できないであらう。

では、出家したもの、あるいはごく一部の在家のものが真理を把握したとすると、彼らにはいかなることが生ずるのであらうか。彼らにもやはり、喜びや悲しみや怒り、身体的苦痛、欲求等が生じてくるであらうが、それは一般のひとの場合とは大きく異なつたしかたにおいてであるにちがいない。われわれの思考や感覚、感情、想像、思い等はそれぞれ密接にむすびつきあつて一つのまとまりをなしている。そのまとまりという枠組みは時とともに少しずつ変わりつつある。そうした枠組みのなかでわれわれは種々の心的事象を経験しているのであり、枠組みが異なれば経験される心的事象も異なつてくるといえる。たとえば、歯が痛いという感覚は人間ならばだれでも経験するものと思うが、これは各人に固有の枠組みによつてとらえかたが異なつてくる。あるひとにはほんの些細な、とるにたりないことであらうが、別のひとにとっては治療の終わるまでの何日間は全く気の滅入る日々であるかもしれない。ここでは、「歯が痛い」という同じ言葉で表現されているが、その感覚の現れ方はきわめて異なつており、それが生活に影響をあたえるしかたにも雲泥の差があるといえるであらう。それゆえ、真理を体得したひとにも喜怒哀楽の感情が生ずると私には思われるが、その場合の感情の現れ方は、歯痛にかんして挙げた二人のうちの後者が前者をほとんど理解できないように、われわれ一般のものには分りがたいものであらう。

執着の心を断つということによつて成就されたことは、上の表現を使えばつぎのように表すことができる。それは、日常的な喜怒哀楽や苦痛、思考、想像、信念等の連関からできていた枠組みから、それらが全く異なる様相であらわれるような枠組みへの転換がなされたということである。その新しい枠組みにおいて基調となつてゐるのは苦悩ではなく平静、

安心である。ここでは、たとえ同じ言葉で表現されていたとしてもはや同じ心的事象とは呼べないほどに、日常的なしかたと異なるしかたで心的事象が生じているのである。^(註)

真理を間接的に知ることについて、科学を例にして述べてみよう。物理学者の話をも素人が聞いて、その内容を自分なりに理解し、ひとにもそれなりの仕方ですべてできるとき、われわれは科学的真理について、物理学者と同じようにはいえないにしても、知っているということが出来る。「知識とは正当化された真なる信念である」という命題に対しては、周知のように近年さかんに論議がたたかわされてきたが、それは主として「正当化された」の意味をめぐるものであり、この命題を一応ここでは正しいものとしてもよいだろう。物理学に素人のわれわれが素粒子にかんして何ごとかを述べるとき、われわれはたいして物理学者の著書や述べたことを引き合いにだして発言をうらづけるが、そのとき、われわれの信念、考えは、その物理学者を媒介にして正当化されているといえるだろう。それはそれなりの根拠のある意見とみなされるのであり、その意味で、われわれは素粒子にかんするそのことを直接的にはないが知っているといえる。

つぎに、直接的知識と間接的知識との違いを考えてみることにしよう。物理学者と一般の素人との対比からはじめてみることにする。物理学者が素粒子にかんするある事実Xを知っているとき、彼はXについてのみならずそれとほかの諸事実や諸法則との関係についても知っているし、Xを発見したいきさつや手続き、意義等についてもよく知っている。また、もちろん新たな事実を発見することも可能である。それに対して素人は、Xが物理学の領域においていかなる位置を占めているのかを詳しくは知らないし、実際の研究にたずさわることもない。それでも彼の知識は、彼のもつ信念の体系のなかに重要な位置を占めている。Xについての知識は、今まで学んだところの物理学の諸知識とかなりゆるやかな連関をなしつつ、彼が世界を見るしかたに影響をおよぼしている。われわれが太陽を見るしかた、水や空気、また宇宙について考えるしかたは四〇〇年前のひとびとのそれとは大きく異なっている。一般の素人の間接的な、専門家のとくらべると明ら

仏教に関する一試論（高橋）

かに欠如した部分をもつ、その意味で貧弱な知識であっても、それはわれわれの世界観の一部、それも基本的部分として重要な機能をはたしているのである。もっとも、科学者の活動はきわめて大きな変化をこうむったが日常の世界のもつ力の強さゆえにわれわれの感じ方や考え方にかんしては昔も今も変わらない部分が多い。カンタベリー物語やシェイクスピアの劇をみると、今の時代との共通性に驚かざるをえない。それでもやはり、われわれの世界観は基本的な部分において以前とは異なっている。

ここで述べたのと同様のことが出家・修行者と在家・一般の者のあいだにもいえるだろうと私は思う。これまで私の述べてきたことが正しいならば、両者は真理とのつながりかたにおいて直接的と間接的という点で違いがある。この相違を科学者と一般のひとの違いと類比的に説明してみることしよう。

その真理に間接的に至ったひとにおいては、物理学の知識を身につけたひとがそうでないひととくらべて世界観の基本的部分に変化しているように、そのひととも生活の最も基礎的な領域において、そうでないひとと大きく相違しているといえる。それは、苦悩という基調をもって彩られる生活の全体にたいして、安心、平静に基づく別の枠組みが厳然と存在していること、それへと至る可能性がつねに開けていること、こうしたことの自覚によってもたらされるものである。

そのひとはそれゆえ、いいかえると、思考、感情、感覚、想像、信念等の一定のまとまりであるところの、自分を構成している枠組みを相対化しうる視点を所有していることになる。つまり、現在の自分に生じている感情や思いが自分にとって必然的なものであるのではなく、別の観点のもとでは、それらは全く異なる様相でもって現れてきているだろうということを、そのひとは常に考えることが可能である。そして、その別のもう一つの実在的枠組みとは、苦悩にかわって安心をベースにしたものである。いかなる癒しがたく思える苦悩、たとえば死ということにかかわる苦悩であっても、それの生ずる日常的枠組みからはなれて、それと異なる視点からみてみるならば、もはや大いなる苦悩としてではなく捉えなおされうる。確かにそのひとは真理を直接に把握してはいない。だから苦悩が生ずるわけであるが、それがそれ自身絶

対的なものではなく、もともと生じなかつたことさえ可能なものであるというふうに相対化しうる地点にそのひとはいるわけであるから、真理にたいして全く知的なつながりをもたないひとと大いに異なっているといえるだろう。

日常的信念にかんずると同様な理由づけによっては、宗教的真理を間接的にしか知りえなかつたし、そのような知識がもたらすのは上で述べたようなことであらうが、こうしたことも、やはりある種の救いと呼んでよいように私には思われる。つまり、悟りと救いという仏教における二つの切り離しがたい目標は、私の行なつた解釈のもとでは以上のように捉えなおされるといえる。

さて、本稿を終えるにあたって、こうした解釈に関係してくると思われる二、三の問題を簡単にみてみることにする。まず、この解釈は、あくまで日常生活をおくるひとが、それほどの決意もなく宗教的真理を、いうなれば物理学の知識のように自然に信じるということをめぐるものである。それゆえ、真理の直接的体得におけるような厳しい修行もここにはないかわりに、真理を知つたことから直ちに生き方が明確に規定されてくるわけでもない。いいかえれば、宗教と倫理がここでは、厳しさを要求する原始仏教のように、直接むすびついてはいない。厳しい戒律の遵守ということも、また、覚者の智慧というものもここには期待できないのである。

逆にいえば、ここではひととは相当に自由に生きることができるのである。ただし、間接的にであれ真理に触れたかぎり、その真理のエッセンスともいふべきことに矛盾する行為はさしひかえるべきであらう。それゆえ、唯一、ここで考えられる規範は、種々の執着にたいする警戒、いいかえれば、執着しすぎるなということ、あるいは、自らの考えや意見、感情、思い等を絶対視するなということであるように思われる。その他の道徳的規範についてはさまざま選択肢があらうが、私は、できるだけ苦悩の少ない生活をおくるため、そしてそのことを自分のみならず他のひとの身の上にも考えるために、世間でその時に通用している道徳に、それが実情に合わなくなつていたり等の欠陥をもつていないのであれば、従うとい

仏教に関する一試論（高橋）

うことを主張したいが、それはすでに道徳哲学の問題であり、これを論ずるためには稿をあらためなければならぬ。

つぎに述べておきたいことは、日本の宗教の歴史にかんしてである。^{（註）} 仏教の歴史をここで詳しくふりかえるゆとりも、またその用意も私にはないが、救いと悟りという仏教の両輪についていえば、仏教が伝来して以来、救いという側面がひとびとの心をとらえたきたといふことはいえそうである。それについて、悟り、あるいは仏教の真理の自覚ということに定着しなかつたようである。一般には、日常的世界にありつつ日常的利益をもとめたり、あるいは、日常世界での期待の延長上に来世をねがったりすることが多く、そこでは日常的世界の相対化ということが不十分であつたと思われる。また、それがなされる場合でも、執着は断ちようがなく、この世は諸行無常であるというネガティブな諦観が主流であつて、日常とは別の脈絡の存在から、それへの自覚によつて現在の苦楽を相対化し今を充実して生きるというポジティブな諦観はひとびとにはほとんど顧みられることはなかつた。

最後に、仏教以外の宗教について述べてみたい。まず、本稿では日常的信念と近いしかたで仏教の真理への信念が生じうることを示そうとしてきたが、そこでの条件を充たすのは仏教にかぎられないだろう。その場合、もし選択できる状況にあるのならば、いずれを選ぶかは、説かれてゐる真理、そしてそれを体得したひとにおける違い等で判断することになるだろう。たとえば、そこでの真理がどれほどわれわれを納得させるものであるかということも、一つの選択基準となりうる。

多くの宗教はそうした条件を充たさないが、この条件そのものが日常的信念にかんするものであるので、宗教的信念を日常的それから明確に区別する立場からはそれは非難に値するものではないだろう。そうした宗教では、説かれたことに納得することで信念が生ずるのではなく、決意や超越によつて、あるいは、代々にわたつて教えられてきたことをそのまま受けとることで信念が生まれるといえるだろう。そして、当然のことながら、信仰の到達地点や救いのありかとも異なってくる。^{（註）}

私は、慣習的実践や伝統といったものを道徳の根本に置いて、道徳にかかわるさまざまな問題を考えたいと思っている。それによって、無実の者を殺すなかれという規範や、正義や権利にかんする諸規範を考察することになるが、そのさい、慣習的実践としての宗教的実践の重要性を忘れてはならないだろう。道徳の領域においては、宗教が歴史的に文化の核の一つとしてひとびとの生き方を規定してきているという事実は、私が本稿で取り扱ったことがらよりも重要なこととしてある。

註1 こうした条件の成立による理由づけはもとより、そもそも宗教的信念には理由づけは不要であるという立場もある。これらについては、B. Davis, 'An Introduction to the Philosophy of Religion', Oxford University Press, 1983, Chap. 1で要領のよい紹介がなされている。また、そうした立場としては、たとえば次を参照。G. E. M. Anscombe, "Faith" (in 'Collected Philosophical Papers', vol. 3)。

註2 四諦とは次の四つの真理のことをいう。凡夫の生存は苦しみであるという真理(苦諦)。苦しみの生起の原因は妄執にあるということについての真理(集諦)。妄執を消滅させると苦しみを滅し尽くしたニルヴァーナに至るという真理(滅諦)。この苦しみの止滅に導く修道法は八正道にはかならないという真理(道諦)。

十二因縁とは、以下の十二のありかたがそれぞれ順次に次のものを基礎づけている関係を述べたものである。すなわち、無明、形(行)、識別作用(識)、名称と形態(名色)、六つの領域(六入)、接触(触)、感受(受)、妄執(愛)、執着(取)、生存一般(有)、生、老死。(中村元「ブッダの教え」、『講座 東洋思想』第5巻 東京大学出版会)。ただし、本稿では「妄執」と「執着」を区別せずに用いた。

なお、四諦については、M. Carrithers, 'The Buddha', Oxford University Press, 1983, Chap. 4での説明が興味深い。

註3 こうした枠組みへの転換がすべての人において可能であること、そして、世界はこのように、苦惱から安心・救いへとつねに移行するように成り立っているということ、このことは、「仏」という概念が拡張されて世界そのものと理解されるようになったとき、「仏の慈悲」として表現されることになる。

もちろん、世界が究極的にはこのようになっていても、私の、そして他人における現実の苦しみにたいして何もしいないことがそこから正当化されるわけではない。苦惱・苦痛からの解放がそもそも動機となっているのであるから、それは当然であろう。

註4 山折哲雄『仏教信仰の原点』(講談社学術文庫)では、鎌倉時代を、伝統的な靈魂信仰とそれを超えようとする仏教思想との葛藤の場面とみている。氏によれば、靈魂信仰は庶民の生活実感に深くしみこんでいるが、仏教思想は日本の文化の表層の部分にと

仏教に関する一試論（高橋）

どまっているという二重構造的な関係が日本人の宗教観として続いているという。日本における宗教にかんする慣習的実践の大枠はこのようなものであろう。ここでの私の解釈は、まちがいになく、ここでいうところの「仏教思想」に属するものである。また、それは、たとえば、福沢諭吉のいうような安心の法をもたらしうる解釈でもある。

註5 しかし、たとえば、他の宗教ではなく仏教における救いが最も根本的な救いであるときには、上述の条件は充たされていらない。ここでの信念は、現在の物理学者が一致して真とみなしている基本的命題は真であり、物理学的世界の基本的構造はそれのようではありえないという信念と類似している。

また、本論にも述べたように、私の解釈からは仏教が最高の宗教であるということは帰結しない。それでも、少なくとも、無神論者や、あるいは、現世的欲望の延長としてのシャーマニズム的宗教しか信じられない人にたいしては、別の選択肢を提供できたのではないかと思う。